絵本古實池

四編

九

へ 13
1833
45

繪本太閤記七篇巻之九

目録

魚津落城話
魚津の城兵并柴田が人質を殺して生害する圖
勝家軍を返して上杉勢と戰ふ圖
上杉勢退討柴田勝家話
一揆原勝家が上洛を支る圖
森勝蔵長一上洛話

森勝蔵人質を殺して上洛を阻む圖
鬼臥内蔵人安兵部の妻を安仲なりて娶らんと欲る圖
信雄梅心を遣りて鬼臥内蔵人を仕へしむる圖
小田家の旧臣等評定御遺跡之話
坂氏の女熱田の神司岡本が宅にて信孝を産む圖
吉郎右衛門三七若の御誕生を信長公に言上の圖
佐久間玄蕃秀吉を拒む圖

繪本太閤記四編巻之九

魚津落城

天正十年六月二日柴田勝家佐々前田等と計を定め魚津の城の四面より鉄桶のごとく取囲み急に攻て責立ける城中の将士必死と覚悟し矢玉石飛火箭を放ちかけ命を惜まず防ぎ戦へば上方勢大軍なりといへども陣際へも近寄難く攻悩でぞ見えたりける勝家謀て計を設けねば引退きを便りに諸所に勢をまとめ城中へ使者を立て云ひ送るは今朝上方より急使到来ある所其方が森勝蔵長一信長より討て出て小国手の切所を打破りて乱入んと及びければ是によりて景勝是非なく退きしが此上は城を捨るなれば此城を開渡し去月の縁結を如し景勝の旗本を敵せんとも御降参ありてこそ肝要のことにあれば早く退去あるべしと申遣す城中

烏津の賊兵
柴田が人数
を殺し遂
生害する図

織部正諸士を集めて評議しけれども衆口區々として更に一定せざりし時に
若き者進み出て申けるは我々當城を明渡し越勝公の旗本と見繕ん事
元来の本意なれども敵ね柴田佐久間等に謀り出され腰抜と命を失はんも
本意ならず流石に名ある士まで我々が命を惜みて城を渡し剰へ敵の謀計に
返報されたりと云はれんは此身までの恥辱なり主君にも悪名を着すると云
只々當城を固く守り矢種玉薬のあらん程は防戦し運尽なば其力の目
釘の續かん限り甦入て戦ひ討死とこそ思ひ定めてひとへに是を根て城中乃
ね吉江織部正は其四郎は出陣入る中条越前守竹股三河守阿部右衛
門尉亀田小三郎寺嶋若林等の輩く此議に同じ右の趣を以て勝家に返
答に勝家再使者を城中に遣し捕てゆるるは城中の諸ね我々が謀計に
んるを危ぶみ両城無念と思ひ先鋒の當座の人質を遣しける心を緩て
退去あるべしと申送るに依て衆ね評定して敵方より人質を送る誠
上は別に子細あるべからず抱ゆる所なりとて二騎も早く来山へ馳来り君の御馬
先にて討死せば是ぞ誠の忠志なるべしとて既に開城すべき事極りたる
躰く勝家へかくと返答に及ばし勝家が従弟柴田入道専斎と云ふ者と蒲生
が甥の佐久間右衛門尉と両人を質として城中へ送りけるに城ね是を請取
て吉江河田を始め城兵は悉く三の曲輪へ移りて本丸を佐久間に渡しける
城兵思ひの外の敵の謀り探せ本丸を請取と否や忽ち鉄炮を打かけ矢を放
て責立れば柴田勝家佐久間盛政門外より鬨を挙て城門を打破り内外より
喚き叫んで責討れしが吉江織部正河田豊前守寺島山本寺の城代其外
十三人の大将等は大きに怒り牙を噛み本丸へ攻込で大将を取て戦ふ河
田豊前守忿みをり筆て思ひ設けしりなを安くと謀れぬるこそ口惜

勝家軍を返して上杉勢と戦ふ図

それへ才をつけ正軍様く乏しとて就中に切て入西の東へ迄靡けり
東へ馳来る合ぬ敵と見る時は鐙の端にて蹴て落し毛もよく武者と見て
は差向押付揚竜の面を掻ひて切て雑兵雑兵の敵て近寄者ぞなかりき
追ども其身は十三ヶ所に深手を負ひ三の丸へ引へしに若江を始め郎卒士
ねども今は七ヶ所に痛手を負ぬ者もなく今は是まで自害と定めしと柴田
殿佐々新右衛門尉両人を一論に宥め皆一同に腹搔切て死しける是
よりして柴田佐々等勝家を三度上げ虫に越後へ乱入せんといさむ
る大方ならず
上杉勢退討柴田勝家
去程に小田の軍は柴田佐々森の面々合戦に勝利を得勢ひ利刀の
竹を破るが如く越後を責滅さんと其軍議とりく某月山より

上杉景勝六月に日城して諸方の後軍陣方ね云の様くと長臣直江
山城守兼續近江守等を先として多くの者士共集り太田切口とや加ゑ
勢とすべき柴田が勢とや押出べきと評定宮中之執るに六月よ日乃
着方勝家が魚津の陣を退及び岐阜前田玄以より急使到来して戦
六月二日京都本能寺二条室町の城に於いて右大臣信長公惟任光秀
が叛逆により御生害ましく其報然れば一騎もなく上洛ありて逆臣光
秀を誅伐すべき旨申附られしが柴田勝家佐々成政摩重等其
外者士軍卒大き不移べき旨申燈灯を失ひ中流の楫を絶
る心地して騒動なりしが太田切口の森勝蔵三國峠の瀧川
條ちまへ早速使者を以て此凶変を告られば何も動天周章なんりの
なり時勝家諸将を集め中るは信長公不慮の事にそ逆臣のねま

弑せられ給ひ于今ハ我々悩くも此所に滞陣し給へバ行衛もなく馳
登て惟任を討亡し君の御無念を報ひ奉らん諸々其用意あるべしと
ありけれバ依て越後乱のうち打捨城に上国の用意をなしけるが
へ返しける所に六月六日の暁佐久間久右衛門同源六兵衛人数五百余人
を相従へ魚津の城に押し寄て勝家ハ一番に馬を馳て都をさして登り
けれバ佐々佐久間我後を追はしと追来りて後陣を乱してより返す
城に希代の振る実にやや好る門を出し悪むべき罪を責るところや
小田家の諸将も混じ上洛せしが小城乙列ハ一時に此は退きたく上杉方
勝光を受て大きに怒びいざ上方勢の周章てたる引纏を追ふて討
かけ迄やと先に山城守本条出羽守図将左内高ゑ余勢後陣を乱し
揉にかんでぞ追ひたり加賀の国境にて揉事なく柴田勢を追ひ付て喰止

めり柴田が後殿佐久間玄蕃允彼方より後備へを先立に出し
鉄炮をうちかけ防ぎ戦ふ上杉勢何か臆しも拒べき事に山城守本
条出羽守敵寄下野守等自鎗をあげて突かれバ我先と上杉方
勇卒得る具をもって喚き叫んで戦へバ佐久間も突を破られ
じと勇を震ふて戦へども京都の大変にて浮足になりける軍兵なれバ
さんざんに切立られ佐々陸奥守が後陣にあり先に佐々城の柴
田伊賀守あへて只一人して戦へども越後勢の先手拝光に突立てられ
惣崩れとなり討るる者数を知らずけり勝家ハ旅本の勢三百余人
を引率し衆軍を後に引返し只一人上方さして馳けれバ佐々佐久間等
が上杉勢に追討せられ遁し所をも知らず越後国を上りしが佐々佐久間等がま
馬の後より追付事の次第を注進けれバ勝家大きに驚きいかれ

せんと思慮なる事に今なる急んとハいへども衆軍を捨て我一人都まで登り
なりても惟任光秀が弱兵の敵にはあらず小勢の対陣討取じては後代
までの恥辱之不如引取して上杉勢を引きらし衆軍を引て上洛せんと
忽ち馬を乗返し後陣へさそれ急ぎける所に上杉方は退く跡を乗て襲軍
勢加りて佐く佐久間盛政さんぐ迎撃る故横合より柴田勝家が
二ッ三ツ突きれバ思ひがけなき故後勢一円にさんぐと突立られ足下
計乱れたる所を見て佐く佐久間が軍兵ども得たりかしこしと取って
返し関を作て戦ふ上杉勢も踏止り身命を惜まず乗込戦ふ
互に引じと戦ひけれバ果べきとも見へざりける所に折節も山の端に赤日を
雪の間の月雨雲まよ變ぶ東方節南よりかゝりそども双方引じと争ひしに
折しも白雨盆を傾るがごとく篠を乱して降来れバ今日の戦ひ是迄と

物別して三丁計り引退き互に陣を固めたり勝家ハ急に味方を下知し押び
しく旗を揃せ旗指物ハ陣中に数多立並べ軍勢を強く立上
方にして一手にこそ登りたる暁天上杉勢ハ囲みを解て押寄て戦ひを
催せども敵一人もなく退く旗のてを立てたるハ術乗失に旗を立て
又追かけて討止んとひしめけるハ出に城守是を止め味方軍卒今ハ
十分に労れてあり此上に追討せバ却て敗北を需むるなり倦る軍を追
ふなかれと追討ハ無用なりとて討取る首九百余級其一所に切かけさせ本国へ
こそ帰りける柴田勝家ハ辛うして上杉勢を遁し息をそろりに馳けしが
京都の騒動信長公御父子御生害のよし頻りに風聞ありしかば家には五百
騎計なり七百騎の其武士ども本と方々より出来り勝家が軍を出く
上洛を妨げしかバ佐く佐久間等が騒ちーしく戦ひてよる頃ハ此日

一揆原
勝家が
上洛を
支る
図

又五日国をたて日数を重ね六月十八日江州柳ヶ瀬の宿に着陣せしに越前守より飛脚到来して去る十三日光秀と山崎に戦ひて一戦し大利を得光秀が手下の残徒悉く誅戮し早ぬと告ければ勝家大きに驚き又人数を率て逆寨を悔めと詮方なく今は入洛しても更にと空しく尾州清洲にこそ赴きけり

森勝蔵長一上洛

去程に太田切口へ向ひたる森勝蔵長一は去る頃国人の一揆を起し越後へ働き飯室肥後の為に敵の首塚築せ柴勝が居城近き関山迄切入三年程に陣をとる所に柴田勝家より右大臣家御父子御生害の由告ければ先物も先敵は信州川中嶋の居城へ立帰り俳家の城主毛利河内守を相伴ひ己君の讐を報ぜんがため上方へ打上らんとせり

信州の住人芋川周防守長一が所へ来り足下上洛せんとの企なるが我々一揆を起し遮り止むべし若此儀は心に任せ難きに於ひては我々一揆を構へ上洛の路次を相妨ぐべしとぞ長一是を聞て大に怒り此者右大臣家の恩を受て武勇其名高く天下に隠れなき者なるに今其詞を発するなりば此者十分の勢を催し只今一戦に雑兵を討取て其上にて人数を立返すべし我命の及ん限りは渡さじと罵りければ去日を始め国人どもいかんともなすべきやうなく家に於ひて長一即日川中嶋を進発して濃州へより陣を忽ち一揆発て道々に相遮る長一が勢同じく自ら鎗を提げ諸卒を下知して切まくり数ヶ所の合戦悉く討勝寄来る一揆を仕拂ひ上方をさしてよりければ猿ヶ馬場よりの敵て逃退る間に家に長一国々の人質を悉く突殺し虎尾を踏で長途を恙なく六月十七日濃州岐

本梅長一人悠を殺して上洛ところ図

阜に来る時に羽柴筑前守早くも光秀を討亡しぬると聞へければ是も
上洛して陰忍として尾張清洲に集りたる宴に信長公の次男北畠中
将信雄卿は此砌勢州長嶋に在しけるが去る六月朔日御父信長公参へ
御舎兄信忠卿京都まで御出陣の有旨聞し召れ御動定伺ひのため家臣
岡田某を京都へ登せ給ふ然るに信長公の筮の従に伊東安仲
と云ふ者あり藝能に長じたるを以て出づれば信長公の寵を蒙り此度
も御供に召具せられ本能寺の御本陣に宿したる所に惟任光秀逆心を
企て不意に本能寺を取囲み終に信長公を弑し奉る伊東安仲武士
にあらざれば逃出て白禄の方へ逃行たるが図らず信雄卿の臣岡田
内蔵介に出合ひ安仲見し所をつぶさに語し涙を流し長臣へ申しかば信長
公惟任日向守が謀叛によりて本能寺に於て弑せられ給ひぬ我等

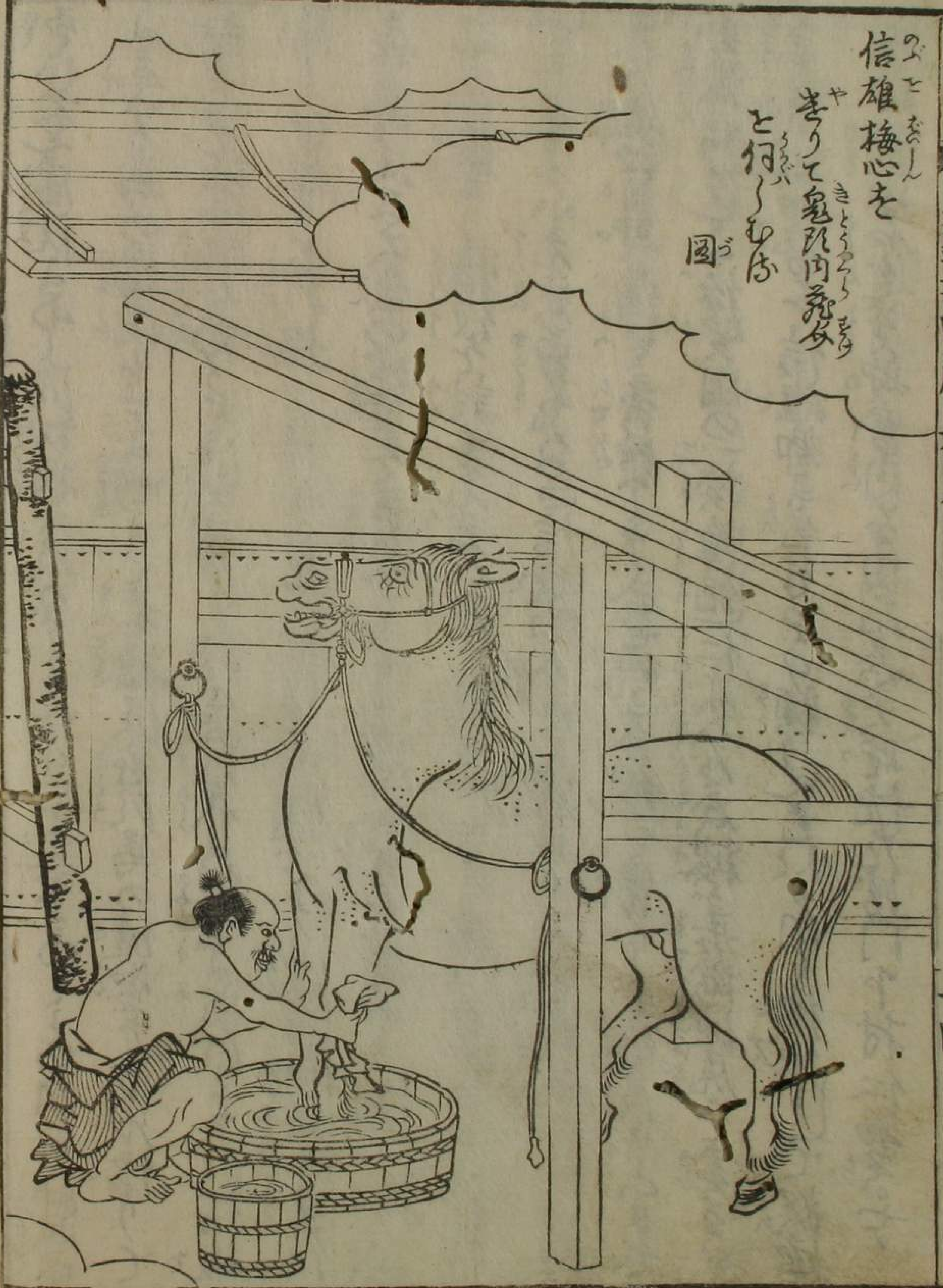
ども若年にも逢ひ力を尽し防ぎ戦ひしかども叶はず遁れ出たりと内蔵介に
是非驚き入たる事どもの身に縋ひて申けるは
当時日本の内に於て信長公御父子を安々と討亡し申べきや漫りに偽り
を申さるゝそれ安仲面を返す事もなく偽りを申されよそれより今信長公
慕はしくまじくして来られたるの偽りと申すは日本の地より身を定め
承るまじく此内蔵介今日我今信長公御父子を御欺の為上京致さる和
に相成る大変これありとは上京せんも要用之一時も早く立帰り主君信雄に
〈申上べし〉然ども途中まで帰りて此の事を申さんと申て彼信雄卿へ注進をとげれ
まづ某我と倶に長嶋へ来るべし罷出んや安仲申けるは来らせ候ば信
雄卿へ言上致すべきは何の思ひ寄らぬ事にて馬上に乗れば歩行にて遅くし
参り着ん其方が所為にては先刻信雄卿より相勤致すと不和なれば急く見ん

鬼臣内蔵助
京都の変と
安仲に実く
精臣に偽る図

思ひ給ふ也と此服指を実度と思ひ入まゝを縦横に言上なしければ縫ひあるへの
みえざりしが程なく跡より某も参上を遂け其に申さばしかる内藤殿を召と曰
互に服部と相替く別盃を告げ内藤殿ハ難に誓を合せ一同に去ぬる
さして馳帰る其日の暁京へ三十余里を馳て終に長島へ着ぬ然ども此
馬労甚しく殊に希代の發足故信雄卿の御前に出て其頼きまとゆける
に信雄卿に信ぜざるよし服部を召し急として是を申せども打ち激怒なりと
しあれバ却て私怨あらんと睡して給ふ訝き疑き是を吟ずる法方なく既に注
進これなりとて己が宅に帰りける跡にて信雄卿梅心よつて家人に命じ
鬼頭内蔵介か宅に訪ひ其体を覗しむ此時鬼頭沐浴し浴衣ながら梅
心に逢て我が狂乱しける乳と思ひしによつて足下を以て晴に親せ給ふなる
んなれバ某が狂気せしかの虚説をいたせしに寛り切腹致さが大なる妄懲に

望む事虚説にあらバ切腹に及ばざらんや事を憂るのともひつて外郎家
に去る馬の湯洗をるに断して前様鬼頭馬の健驚なる所謂りて
感ずる甚し梅心帰りて此由を申上げ鬼頭定に狂気の兆なくして信雄
御これに依て程信じ給ハざる事に其日望朝諸方より更に秘御進くに信
長公御父子大義の汲守を告来る寔に始めて驚き給ふ限り退し梅
都に継登り惟任を討て先君の報を報ずべしとて弔ひ合戦の用意を
せらるゝなれども元来勇気なき信雄卿今日より明日よりとて出陣延引し六月
九月近江日野蒲生秀郷と申合せ終に合戦を営んとて勢揃去るまで
出陣なりしに伊賀国の一揆蜂起し仁木入道が居城池尾を責るの
急之支援加勢を信雄卿に乞ければ頻りに是に向て後詰として沢源
五郎秋山右近将監宮内右衛門平田左京天野佐左衛門下村仁助等七人

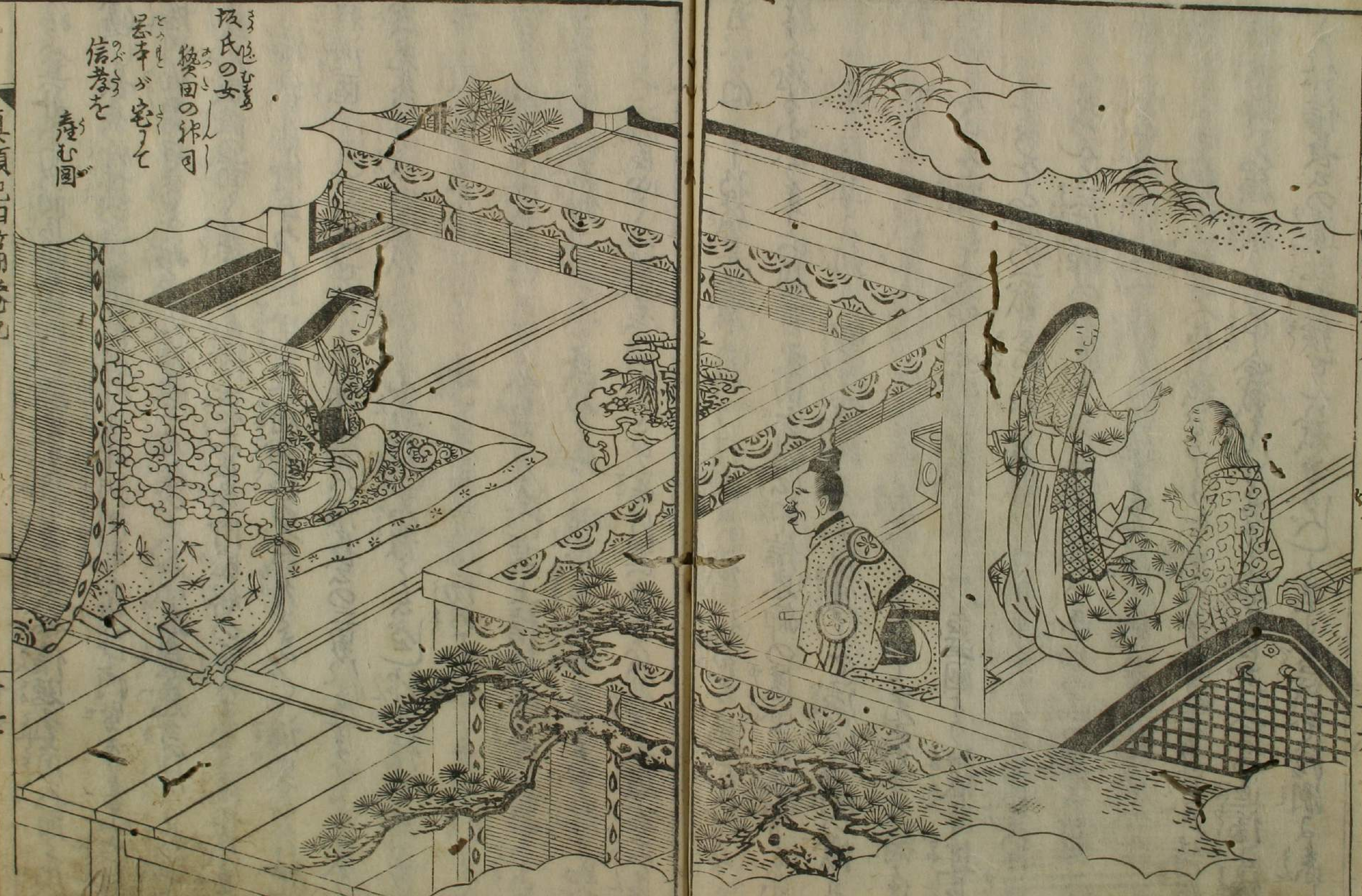
信雄悔心を差りて鬼頭内蔵助を
と伺ハしむる図



余人伊賀國へ發向ありし處に押むかひ信雄卿も去ころ出陣ありて見合せ
給ふ處同月十七日猶一揆原悉く退拂ひ御勝利を得凱陣せり然る間に
賊將光秀は主殺の謀ひしく秀吉が為に滅亡し京都静謐に及びしを
尤今又一揆起ても捨置じとて再び一揆原が餘黨を退治し同月十九日
蒲生秀郷並に右大臣の靈柩中をはるばると尾州清洲へ参向ある
其外神戸三七信孝御兄關太郎左衛門永秀為計度ね公紗信照中
河瀬勢平遠秀る山右近將監川尻肥前守丹羽五郎左衛門長秀等清洲に参着す

二　小田家舊臣等評定御遺跡

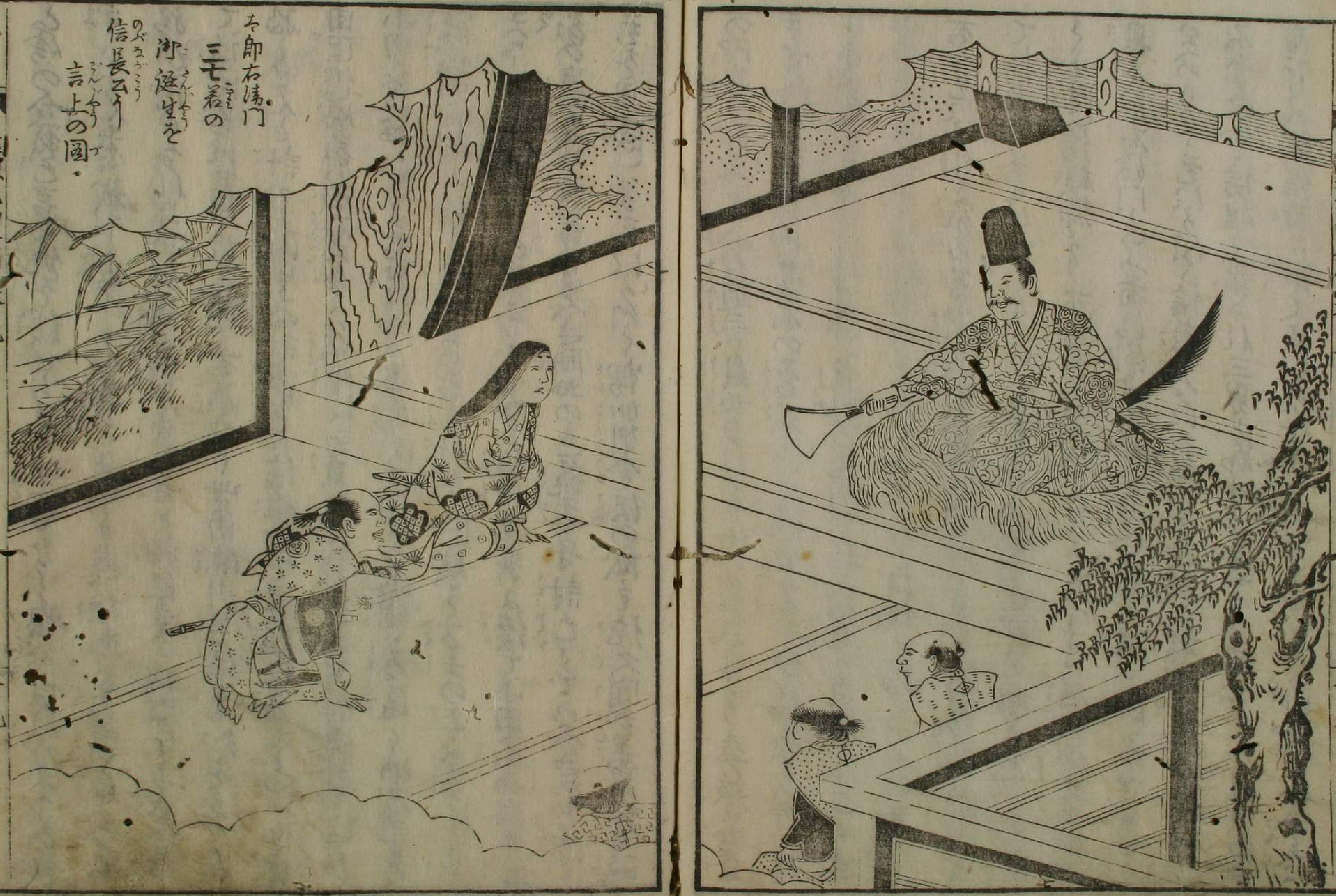
尾張國清洲の城は前右大臣信長公の居城なりしが信長公濃州岐阜に移り
給ひ清洲を中将信忠御讓り給ふ其後天正三年近江國安土山に城
を築き右大臣是に居城し給ふより岐阜をも信忠卿に譲り給ひけり
是によつて中将岐阜の城に移り清洲よりは織田信包を城代として守せ
給ふ然るに今年六月二日前田玄以法印信忠卿の遺命を蒙り京
都を逃て岐阜に到り幼君三法師并御簾中を誘ひ清洲の城に
移らせ其後岐阜の城は中将の御居城なるをもて光秀より討手
の向はんことを恐れて之を移らせり然るに羽柴筑前守秀吉西國より馳登り逆臣
惟任光秀を亡し後乃一戦に亡ぼし京都の仕置を定め亡君右大臣の遺
跡相定めんと三法師の御供して清洲の城に来り向ふに小田中将信雄
御も右大臣の御墓所不審蒲生右兵衛大夫賢秀と倶に来り給ひ父兄の御
跡目天下の武将にも備るべき者なるべしと思ひ給ふに又三男神戸侍從
信孝卿は忠義にして弔合戦先にとなして右大臣御父子の追福に備へ
られば信長公の遺跡を續せんは我なるべしと是も急ひで清洲に来し



真顕記四篇巻九

殊に其外小田の舊臣柴田修理勝家池田勝入齋信輝丹羽五郎左衛門長秀其外様の諸侯ハ筒井順慶細川刑部中川瀬兵衛高山右近塩川伯耆守等を始めとし信長公恩顧の大名小名蒲生忠三郎森金森不破堀の面々悉く集會し右大臣家御葬禮の事ハ天下一統の武士と勝ぎ事なれバ御法なれバ前代に有間敷活法なるべき旨さまぐ評定なし先元祖の三蔵匠と成して一盃せんには織田信雄卿ハ信長公の二男にましませども今度光秀謀叛の合戰に臨まず光秀を亡し自身と遂げて光秀を誅し功あらざれども三男にして信孝卿ハ秀吉と倶に光秀を亡し自身と遂げて光秀を誅し功あらざれども三男にて二男を越せ給ふ者しと其上信雄信孝の兩卿は兄弟の中に不和の者にて互に相争ひ爭論出來て天下乱るべし各是を考の者又其外の諸臣心々の越みちに思ふ所あれば先づ小牧右大臣

の御墓所へ焼香へ参る道三ッの息女ありしかども御一人もおはしまさず又此方の後嫡男なる信忠卿の御子三法師丸を以て信長公の御代継と定むべき旨が中に信忠卿之実母は尾州生駒氏の女之其嫡子三法師の君は二人の息女の一人は信雄卿が生れも信忠卿とは後生駒氏の女の生なる所にて信孝卿是は坂氏の女の腹に出生し信雄卿より廿余日も先達て生れ給へども遠国にて信孝卿是は其母の族が卑し故家臣等が宗敬して二男にて定めらるへしと今一人は坂氏の女の腹にて宅に産るゝ者あり信雄卿へ息の嫡なる三七郎殿と遣く聞召と成し三男と定められしが信孝卿ハ立て姿を指揮し我次男なりとも思ひけれども下の非法の首を先達て遂に経て居らず信孝卿の取次の事も鉱く申て又に三男とも不審に信雄は三男にて思ふ所ありて今一度信雄に越て立んと思ひけるが斯る事なる


本郎右衛門
三七君の
御誕生を
信長公へ
言上の図

山崎の合戦に亡君の仇を報ぜらるゝ事一方ならず然れども天下の武主たらん者は我こそと思ふ人も有べけれども信雄卿は先君の御子と云ひ然れば御身の上なれば是を推て拒ん事は世を継べき謂なしと家老て評議有しに其中にも賂く所なく柴田瀧川等は信孝卿を立て武将とせんと計る蒲生為計多かりしは信雄卿を遺跡に立んとの御紫田匠修理勝家は故右大臣よりは婿婿にして且累代の重臣なれば老功といひ小田家には並びなく其右に出る者なきによつて猶更小田の遠く此度光秀謀反の合戦の後も筑州秀吉に欽をたて威を万士の上にふるひ且天下を併呑するの機ある杯見えて惟任光秀に続て小田家の簒臣我家の盗毒は秀吉なるべき間相の筑前守討たでおくべきやと深く是を思慮して是に依って加州金沢の城主佐久間玄蕃允盛政

を密に招き宣ひけるは小田家幕下の諸士数多ある中に我が徒を返り者を独り羽柴筑前守のみ山崎の功をもて威勢を諸士の上に震ひ其外腕ある者は羽柴が心腹の家来我よく是を知りて表に忠信仁義を修りて裡に大望を企て天下を掌握せんとする謀略光秀に勝る事千倍なり我苟くも小田の旧臣親戚の数につらなる事奸臣となし先君の世業を全くせずんば何を以て大老の任に当らんや然れども今兵なくして彼を殺すなば山崎の功を偏執して罪なき秀吉を亡したりと諸士の思はんも口惜し然ればとて此儘に捨置ば小田家の世業悉く秀吉に奪はれ其時に至りて悔とも叶ふべからず我今忠心を発して私の意なき後にして諸人の論を厭ひ席上にて秀吉を殺さんとて是揺を見かけ以て猿なる上は先君御家に[illegible]の席にて刺ひて

秀吉公既にしかん隙が好るを待て忽ちに坂[illegible]心を安く
せしと盛政委細告げ秀吉を殺さんの巧みをなせしより安くは
是ての条々の如きは兵を斬捨られんと密談を殺害に及びぬ其の後乙日
御跡目相続の儀を談ぜしとて小田家大小の家臣清洲の城に集り
評儀を定め附柴田修理丹羽長秀を始めとし先より中通り当時附
國の附武将の御家督定まらざりしては一日も天下静なるべからず今日の
會合は何ぞより御家督とお見立べきの間古書伝を論ぜし者あれ
をや得し宜者に付て議論みだれし先素が有れば神戸信孝殿を御世継
に定めん其故は信雄卿を兄とし此は嫡なれども実は次にあらざれば
是もあれば山崎の合戦逆臣光秀を亡し先君の御憤りを散じ奉りしも
是皆信孝卿の力にして羽柴筑州自分の功とし思はれ光秀右大臣

御父子を害し天下を掠んなる大逆畿内に及びし大小の諸侯信臣下
郎等に至るまで信長公先君の仁を忘れて漸く悪むべき家を立て人心皆光
秀に服し忍ぶ天下を掌に握らんと欲する羽柴筑州只一人主の國
弔合戦を営むとも誰か之に随ひて命を戦場の塵となさんや先君
の公達信孝卿を主となし奉りて小田家恩顧の大小名命を捨て
戦ひ光秀を亡しけるは全く其功信孝卿一人にあり然るに筑州無大
ねの職を奪ひ主人の公達をさし置き自ら兵を率ひ自分の功と存じ
心底甚不審なり此上は御世継定りし上諸士一統の議論もみだし御家
督に押ひては信孝卿なるべしと云羽柴筑前守は附席を進んで申さ
るるは大老の判断理なきにあらねども天下の御後見は私の為
にあらず公道を以て論ずべきの人信雄卿信孝[illegible]は故右大臣

佐久間玄蕃
誓紙拒む図

御在世の砌より上男三男すぐれて既に小留[illegible]隨ひ奉り
今信長公の嫡々信忠卿の長男三法師君幼稚[illegible]家督にましま
を御一門のうちに付ては論ずるに及ばざる事なく其嫡孫を捨て他家に
續の信孝卿を御一門にえらんとする理に的らざる事とはんくさ候ふべく
申されける時に佐久間玄蕃進み出て秀吉をはたと白眼新参の
羽柴筑州大老たる所詮に候ふぞ剰へ理に當らず謀り給ひ候へ何ぞ
そや其上水上の泡と消えし幼君の御世継と定め自ら天下の權柄を
握り小田家の政務をめんと謀られ小田家の政務を進て御跡目をさだへ
るが玄蕃殿計よりて不[illegible]て覺とも組ん佐久間盛政掴挫んと挨
あれども秀吉騒ぐ色なくこれ思ひもよらざる事を承る物かな先ず
大老新古の差を論ぜんは忘れやすべき者にもあらず家来が不才を出し

するのこそ幼君を以て天下の權柄を掌にせんとの謀叛甚だ疑
然るに寡人先だって幼君三法師君御世継に定まりしも上に大老匠あり
旧別の士に為る計多し柴田大老を始め中河山森を始めとして
臣右老殺を知りて柔軟に継にたりし豈乏と其信に大名ありや
況や柴田氏もさき近臣も故右大臣の恩恵を蒙りし不忠議に一方の
をも命ぜられ只今に及び身のいかんぞさる大事心に思はんや且又山崎
の合戦に於ても信孝卿をはじめ参りせし座に在諸士の為計多けれ
河る山崎皆兼進めてゆるさじと再三辭すれども兀人
皆殺て許さず而今度の合戦々々君父の仇を報ずる吊合戦なれば
進みて討ち右大臣の御憤りを散するに於ては忠は日を貫
し光秀が首門を治眼元を望くせば容易[illegible]如し難二葉

に仇を切んが爲殿を思ふからん家を以て諸[illegible]任せ柔弱に
是ねにかり急戦を催しける独立せん志にあらし佐久間玄蕃允
孫娘了無れ之秀吉我を若年者と侮りて己が言を用ひざる今の言皆
大老匠作への返答之匠作は故右大臣の親戚なるに至人と同じ不敬
失言過言がごとしと刀遁れ表立たる者一座に並居る所計多く兼角中河
年る山瀬惠多筒井両人の中を押隔中にも筒井順慶は老功の武者
好ろ佐久間を押宥め年若き今日の會合はお互ひ忠心を磨き小田
家お續を計るにあり大臣の面々争論に身命を果しいんは全く
先君へ不忠ってそれならべしさらく愚意を以て案ずるに信雄信
孝御兄弟其中睦じからず今両人の内いづれを世継と定めたりとも必
乱を生じて當家長久の計にあらじ幼君三法師殿を御跡目と定め

信雄信孝両公を以て後見とし柴田匠作の計るに丹羽長秀
秀吉の二人大元老を司り天下の政務大小の事に至っては相
談し国に付て執行ひ給はゞ天下平定し小田の家全く石よりも
固からん実に挙ひて一座の諸将一同に左右に同じ此後に決定しける
去れば柴田佐久間も兼ての計策相違したれども一統評議の上なれば
強てゆくべきやうもなく御家督は三法師君に定り小田信孝両卿を
後見として柴田丹羽羽柴を元老と定め一座大名小名各其領
地を遠からず知分至当誓紙を認め斯く若年に至り何日で御目領地各
衆評の上死当せしむべきにてそれ其日の評議は止にけり

繪本太閤記四篇巻之九終